



サドカイ派という名称は、彼らが、ダビデ王(在前 1000-961)、ソロモン王(在前 961-922)の下で大祭司とされたザドクを自分たちの派閥の創始者としていたことに由来しています。実際は、前2世紀に、大祭司としてのユダヤ人最後の王朝であったハスモン王家の立場〔王が、正統な祭司の家系に属さないにもかかわらず、大祭司を兼任すること〕を支持するエルサレ



アンナスとカリアファ(大祭司)

ム神殿の祭司を中心<sup>トローラー</sup>に形成された富裕な貴族的集団であります。ファリサイ派とは異なり律法(モーセ五書)にのみを聖典(正典)としてその拘束力を認め(預言者や諸書を聖書と見なさず)、ファリサイ派が大切にしていた口伝を一切否認します。死者の復活も天使や悪霊の存在も信じない、合理主義的な傾向を強く持った集団でした。また神は世界のあらゆる所におられるという、神の遍在を認めないために、ファリサイ派の礼拝の中心であったシナゴーク礼拝を否定し、神殿のみを真の礼拝の場と

したのです。こうして宗教と政治はエルサレム中心となり、つまりエルサレムに一元化されて、当時のエルサレム神殿はイスラエル神聖政治の拠点であったのです。このエルサレムの宗教指導者層の与党がサドカイ派の人々だったので、彼らは現実的な判断から親ローマ路線を取りますが、民衆の中に<sup>くすぶ</sup>燃える反ローマ感情を火だねとする暴動が紀元66-70年のユダヤ戦争に発展すると、70年の神殿陥落とともに存立の基盤を失って没落いたします(歴史から姿を消します)。彼らは宗教的にも、政治的にも、そして経済的にも神殿に依存していたのです。神殿は——主「イエスの宮清め」(11:12-26)の記事を学んだときに申し上げましたように——神殿経済共同体として、彼らの利害に直接関係し、その存続を左右する存立の基盤だったのです。ですからサドカイ派の人々は、今、神殿で起こっている「イエス危機」に強い危機感を覚えています。

サドカイ派の人々は、ファリサイ派とヘロデ派の人々がイエスの論駁に失敗したのを受けて、自分たちこそ、この論争の勝利者になるべく、

周到に練られた難問をもって、自信満々で登場してきました。彼らの質問はユダヤ教の教師たちが用いる「ボルト」(無作法)と呼ばれる形式の質問でした。上から目線で、質問によって相手を小馬鹿にし、嘲笑することによって、相手の優位に立とうとする質問だからです。リベラルな合理主義的傾向を強く持つサドカイ派は、実は、天使の存在や復活など浮世離れしたことを信じているファリサイ派の人々が論戦に敗れたことに、ほくそ笑んでいたかもしれません。当時は、サドカイ派(与党たとえば自民党)とファリサイ派(野党たとえば立憲民主党その他)の間には激しい対立があったのです。もしイエスという共通の敵が登場しなければ、彼らは、共同戦線を張ることなどなかったでしょう。そのファリサイ派とサドカイ派の間の対立を示す論争が使徒言行録の23章1-11節に出てまいります。両派の内実を知るために読んでおきます。場面はサンヘドリンの法廷です。被告はパウロです。告訴されたパウロは、この両者の対立を逆手にとって、サンヘドリンの議場を混乱に陥れます。使徒言行録23章1節から。

使23:1 そこで、パウロは最高法院の議員たちを見つめて言った。

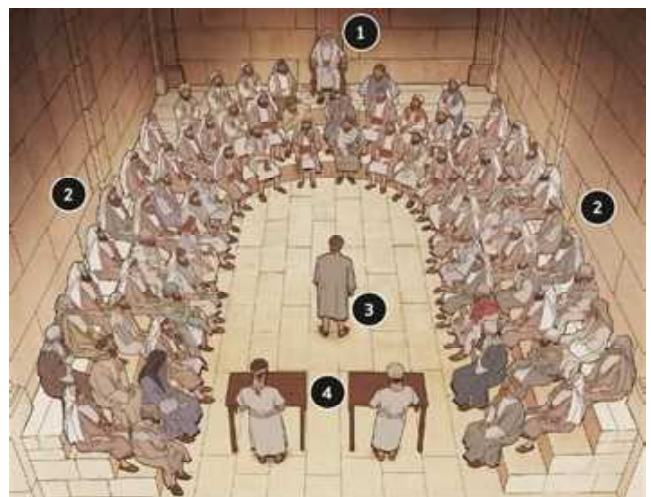
「兄弟たち、わたしは今日に至るまで、あくまでも良心に従って神の前で生きてきました。」 23:2

すると、大祭司アナニアは、パウロの近くに立っていた者たちに、彼の口を打つように命じた。23:3

パウロは大祭司に向かって言った。「白く塗った壁よ、神があなたをお打ちになる。あなたは、律法に従ってわたしを裁くためにそこに座っていながら、律法に背いて、わたしを打て、と命令するのですか。」 23:4

近くに立っていた者たちが、「神の大祭司をののしる気か」と言った。 23:5

パウロは言った。「兄弟たち、その人が大祭司だとは知りませんでした。確かに『あなたの民の指導者を悪く言うな』と書かれています



①議長(大祭司)、②議員、③被告・証人、④書記



す。」 23:6 パウロは、議員の一部がサドカイ派、一部がファリサイ派であることを知って、議場で声を高めて言った。「兄弟たち、わたしは生まれながらのファリサイ派です。死者が復活するという望みを抱いていること

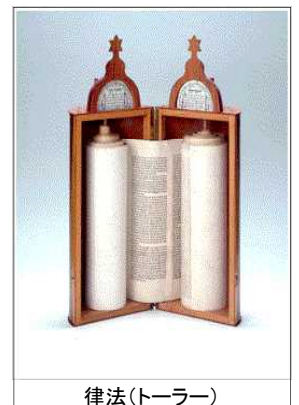


で、わたしは裁判にかけられているのです。」 23:7 パウロがこう言ったので、ファリサイ派とサドカイ派との間に論争が生じ、最高法院は分裂した。 23:8 サドカイ派は復活も天使も霊もないと言い、ファリサイ派はこのいずれをも認めているからである。 23:9 そこで、騒ぎは大きくなった。ファリサイ派の数人の律法学者が立ち上がって激しく論じ、「この人には何の悪い点も見いだせない。霊か天使かが彼に話しかけたのだろうか」と言った。 23:10 こうして、論争が激しくなったので、千人隊長は、パウロが彼らに引き裂かれてしまうのではないかと心配し、兵士たちに、下りて行って人々の

中からパウロを力づくで助け出し、兵營に連れて行くように命じた。 23:11 その夜、主はパウロのそばに立って言われた。「勇気を出せ。エルサレムでわたしのことを力強く証ししたように、ローマでも証しをしなければならない。」

サドカイ派の人々は、このような積年のファリサイ派との対立も、目の前のイエスという敵を倒さなければならぬ今は、気にかけていられません。サドカイ派の人々は、やおら自家薬籠中の質問を、少し得意げに、主イエスの反応を確かめるように、投げかけます。

19-23節。 12:19 「先生、モーセはわたしたちのために書いています。『ある人の兄が死に、妻を後に残して子がいない場合、その弟は兄嫁と結婚して、兄の跡継ぎをもうけねばならない』



律法(トーラー)

と。 12:20 ところで、七人の兄弟がいました。長男が妻を迎えましたが、跡継ぎを残さないで死にました。 12:21 次男がその女を妻にしましたが、跡継ぎを残さないで死に、三男も同様でした。 12:22

こうして、七人とも跡継ぎを残しませんでした。最後にその女も死にました。12:23 復活の時、彼らが復活すると、その女はだれの妻になるのでしょうか。七人ともその女を妻にしたのです。」

死後の復活の信仰を前提として論理を展開すると、どのような矛盾に陥るか、という論理的トリックをつかった質問です。おそらくサドカイ派の人々は、この質問で、ファリサイ派の人々をやり込める成功体験を何度かしていたのでしょうか。イエスもこの質問については答えられまい。彼らはこの質問でイエスから一本取るつもりでした。質問は二つの要素で構成されています。一つは「死者の復活」という観念と、もう一つは旧約律法が命じる「レビラト婚」——兄弟が亡くなったときにはその兄弟の妻と結婚して兄弟のために跡継ぎを残す——という律法規定(申25:5)が組み合わされています。

死者の復活の観念は、文献的には前3 - 2世紀の黙示文学に顕著に表れてきますが、旧約聖書の預言書にすでに、その思想が確認できます。例えばエゼキエル書です。エゼキエル書は、死者の復活を、少し滑稽なイメージを使いなが

ら、明確に同時に華々しく描きます。エゼキエル書37章1 - 10節は、預言者エゼキエルが見た死者のよみが

えりの幻です。37:1 主の手がわたしの



の上に臨んだ。わたしは主の霊によって連れ出され、ある谷の真ん中に降ろされた。そこは骨でいっぱいであった。37:2 主はわたしに、その周囲を歩き巡らせた。見ると、谷の上には非常に多くの骨があり、また見ると、それらは甚だしく枯れていた。37:3 そのとき、主はわたしに言われた。「人の子よ、これらの骨は生き返ることができるか。」わたしは答えた。「主なる神よ、あなたのみがご存じます。」37:4 そこで、主はわたしに言われた。「これらの骨に向か



って預言し、彼らに言いなさい。枯れた骨よ、主の言葉を聞け。37:5 これらの骨に向かって、主なる神はこう言われる。見よ、わたしはお前たちの中に霊を吹き込む。すると、お前たちは生き返る。37:6 わたしは、お前たちの上に筋をおき、肉を付け、皮膚で覆い、霊を吹き込む。すると、お前たちは生き返る。そして、お前たちはわたしが主であることを知るようになる。」 37:7 わたしは命じられたように預言した。わたしが預言していると、音がした。見よ、カタカタと音を立てて、骨と骨とが近づいた。 37:8 わたしが見ていると、見よ、それらの骨の上に筋と肉が生じ、皮膚がその上をすっかり覆った。しかし、その中に霊はなかった。 37:9 主はわたしに言われた。「霊に預言せよ。人の子よ、預言して霊に言いなさい。

主なる神はこう言われる。霊よ、四方から吹き来れ。霊よ、これらの殺されたものの上に吹きつけよ。そうすれば彼らは生き返る。」 37:10 わたしは命じられたように預言した。すると、霊が彼らの中に入り、彼らは生き返って自分の足で立った。彼らは非常に大きな集団となった。37:11 主はわたしに言われた。「人の子よ、これらの骨はイスラエルの全家である。彼らは言っている。『我々の骨は枯れた。我々の望みはうせ、我々は滅びる』と。 37:12 それゆえ、預言して彼らに語りなさい。主なる神はこう言われる。わたしはお前たちの墓を開く。わが民よ、わたしはお前たちを墓から引き上げ、イスラエルの地へ連れて行く。

死者の復活の観念はその他、イザヤ書26章19節、ダニエル書12章やエズラ記（ラテン語）やバルク黙示録などに見られ、主イエスの当時、ファリサイ派を中心に、民衆レベルにまで一般化（通俗化）していました。特に、人々の安心を奪い死の恐怖をかき立てる強大な外国の軍事力の接近や、その他の死の危険を孕む被抑圧的状况では、なおさらこの様な観念





は、人々の心に根付き、民衆の希望にもなったのです。エルサレム神殿の祭司を中心とする富裕な合理主義者であるサドカイ派の人々は、これを認めませんでした。彼らは、<sup>トーラー</sup>律法（モーセ五書）のみを聖典（正典）とし、預言者の言葉を排除したのです。彼らの合理主義は、天使や悪霊の存在もましてや復活など〈超自然的要素〉を含む（ファリサイ派的）信仰内容を認めることなどできなかつたのです。「復活の時、彼らが復活すると、その女はだれの妻になるのでしょうか」という質問は、死者の復活を認めないサドカイ派の人々の合理主義を肯定するための論理的なトリックでした。死者の復活を前提とすると、こんな不合理を生じることになります。いかがでしょうか。見事に、復活信仰の不合理を突いた、と彼らは確信していました。しかし主イエスの応答は、彼らの論理的なトリックなど一蹴してしまいます。

主イエスの答えに行く前に、もう一方の「レビラト婚」に関する律法規定も見ておきましょう。〈レビラト〉という言葉は、ラテン語で夫の兄弟を意味するレウィル

(levir)という言葉に由来します。夫が亡くなったとき、その妻は、夫の兄弟と結婚して兄弟のために跡継ぎを残さなければなりません。申命記25章5-6節(10節)に記されています。

25:5 兄弟が共に暮らしていて、そのうちの一人が子供を残さずに死んだならば、死んだ者の妻は家族以外の他の者に嫁いではならない。亡夫の兄弟が彼女のところに入り、めとって妻として、兄弟の義務を果たし、25:6 彼女の産んだ長子に死んだ兄弟の名を継がせ、その名がイスラエルの中から絶えないようにしなければならない。

レビラト婚を議論のネタにして、サドカイ派の人々は、主イエスに議論をしかけようとしているのですが、レビラト婚はもともと不合理や混乱を生みやすい規定でもあったのです。レビラト婚から

Mark 12: 18-27  
Marriage at the Resurrection



生じる混乱をベースにして、シェイクスピアの悲劇『ハムレット』が書かれたと言われます。〔わたしはそう思いませんが。〕主人公である王子ハムレットの父王の死後、王の弟クローディアスが王位に即き、ハムレットの母である王妃ガートルードと再婚し、王位を確保します。ハムレットの父は、



実は、この弟によって暗殺されていたのです。暗殺された王の幽霊が、夜な夜な出没するところから物語が展開します。喜劇もあります。レナード・

ニモイ監督の「ホーリー・ウェディング」(原題: Holy Matrimony, 1994年)というアメリカのコメディ映画がレビラト婚を喜劇にしています。恋人同士のピーター(テイト・ドノヴァン)と遊園地で働いていたハバナ(パトリア・アーケット)はその遊園地で強盗を働きます。遊園地の入場料を強奪したのです。しかし翌朝、すでにTVで自分たちが指名手配されていることを知り、カナダへ逃亡し、ピーターの故郷のユダヤ教/

キリスト教の(厳格な聖書主義を生活原理とするアーミッシュのような)コロニーへ逃れます。ここでは、アーミッシュのようにテレビもラジオも新聞もないので犯行がばれることはない、とふんだからです。成り行きで、都会の生活に疲れて、同伴した(少しあばずれた)女ハバナを妻として、故郷で生活を再スタートするためにコロニーに帰ったと嘘をついたものですから、そこで結婚式を挙げる羽目になります。結婚はしたのですが、結婚してすぐに、ピーター(男の方)は事故死してしまいます。女は聖書の教え(レビラト婚)の規定に従って〔映画の中の聖書引用箇所にも誤りあり〕、男の弟と結婚しなければなりません。その弟は、実は12歳。ピーターが強奪金をコロニーのどこかに隠したものですから、それを手に入れるために女は、形だけの結婚にふみ





きります。その12歳の弟との再婚から、てんやわんやの大騒動をくり広げます。しかし同時に、その弟との再婚から生じるドタバタを通して、女が本来的な人間性を回復していく姿を、喜劇として描いた作品です。

「レビラト婚」の規定に従って、二人の兄弟に嫁いだ妻は、復活の時、一体どちらの妻になるのか、復活の時には、もう一つ別のドタバタがおきるかもしれません。サドカイ派の人々は、二人の兄弟を七人の兄弟にまで拡大して、大問題として、大仰に論争のテーマにしたのです。「復活がない」という信念を固執する合理主義者の質問は、最初から〈超自然〉的な事柄を排除しています。ですからこれは、真理追究のための、素朴な・自然な質問でなく、質問のための質問、議論のための議論なのです。サドカイ派の人々の動機は議



論に勝つこと、論破することであり、真理探究ではないのです。そこで「死者の復活がある」と主張した時の論理的矛盾を探し、不自然な議論を立てたのです。レビラト婚の規定に従い、次々に亡くなった7人の夫に嫁いだ女性は、復活の際誰の妻になるのか。復活を主張しながら一方で律法ズレンマの規定を守ると、難題におちいる。この質問でイエスを論破できる、沈黙させることができると信じたのです。結果として、民衆に対するイエスの人気を失墜させ、「イエス危機」を回避することが可能になると考えたのです。



主イエスの反論は、サドカイ派の人々の無知に対する指摘から始まります。24節。

12:24 イエスは言われた。「あなたたちは聖書も神の力も知らないから、そんな思い違いをしているのではないか。」

サドカイ派の人々は、自分たちの知らないことを、また確認できないことを論じていることを知らないのです。彼らは死者の復活がな

いことを確かめてきたのではないのです。「死者の復活はない」という仮説なのです。そんな仮説が許されるなら、同等の権利で「死者の復活はある」と言ってしまえばお終いなのです。教室でキリスト教や聖書について教えていると、時々「神なんかいない」という学生がいます。そんなとき、「大学生にも成って、そんな馬鹿なことを言うのはやめた方がよい。自分が馬鹿だと、発表しているようなものですよ」と答えます。「来週教室に来て、この黒板がなければ、君は黒板がないと言えるね。君が黒板の存在を知っているからでしょ。じゃ君が『神はいない』という時には、君は神の存在を知っていなければ言えないことになる。君の知っている神というのはどういう存在なのか、説明してください」と申し上げます。「**聖書も神の力も知らない**」で、おまけに真理に対する謙虚さもなしになされる観念的な議論は、聖書の中だけではなく、至る所でなされています。ここでのサドカイ派の人々の死後の生命に関する無知は、現世における(結婚という)人間間の契約関係が来世においても継続

するという推測につながります。無知を論拠にして、論を展開させますと、とてつもない無知をさらけ出すことになります。サドカイ派の人々の信仰とは何だったのかと思います。彼らは「来世」について無知でした。無知は学ぶことによって超えられる部分があります。しかしそれ以上にサドカイ派の人々の無知とは、自分たちが「来世」について無知であることについての無知なのです〔無知無知〕。それゆえに謙虚さを欠き、学ぶことにつながらない無知なのです。彼らは聖書について無知であり、神の力についても無知であり、自分たちの立てた仮説の効力の限界についても無知なのです。

さらに主イエスは、こう続けて語ります。もちろん主イエスの言葉に「死者の復活」は前提されています。当然です。〔主イエスの言う「死者の復活」も仮説だと批判しても、仮説に対抗する仮説を立てるのは当然の権利です。そし



て主イエスの言葉が仮説であるかどうかは、わたしたちが主イエスを誰だと考えているかによって決まります。〕 25 節。

12:25 死者の中から復活するときには、めとることも嫁ぐこともなく、天使のようになるのだ。

ものすごい言葉です。主イエスは、人が死者の中から復活するときの状態を、「めとることも嫁ぐこともない」と言われました。つまり、婚姻関係から解放された状態になるということです。〔最も濃密な人間関係になる可能性もある〕地上の婚姻は一時的な契約関係であることが、同時に含意されています。その結婚が人目には成功であろうが不成功であろうが、そこには婚姻関係に導いた神の目的が存在します。自分の婚姻関係の幸いを喜ぶ人がいるかもしれませんが、大いに喜んでください。自分の婚姻関係の不幸を悲しむ人がいるかもしれませんが、悲しみすぎたり、自責



の念にかられて、自分を責めすぎたりしてはなりません。その関係は一時的なものなのです。一時的だからこそ、その幸と不幸にも、神の目的が存在するのです。神は関係の中で人を育てるのです。

また主イエスは、「天においては天使のようになる」〔新共同訳は「天においては」を訳出していない〕と言われます。そこから、今この世界におかれている自分の現実を見ることが必要なのです。わたしたちは現実を合理だけから見ることをしないのです。それがキリスト者です。「空の鳥を見よ、野のゆりを見よ」と言われた主は、空を飛ぶ鳥の先、美しい野のゆりの先、鳥を生かし野のゆりを美しく装っている神を見よとおっしゃるのです。主イエスは「天においては」と言われるのです。〔天においてわたしたちが享受する生命があるのです。〕「天においては天使のようになる」者の、地上における使命とは難でしょうか。天で天使のようになるのなら、わたしたちの本質は、この世に、天から使わされた使い（天使）として生きるということになるのです。わたしたちの使命とは、神の使いとしての働き



を果たしていくことです。地上に、人々との関係と仕事を通して、神の愛を分かち合い、平和を創り出し、神のよき音信(おとづれ)を告げ知らせることなのです。

そして主イエスは、自らも、死者の復活について、聖書から論証します。サドカイ派の人々が唯一その権威を認めた律法トーラーからの論証です。26-27節

12:26 死者が復活することについては、モーセの書の『柴』の個所で、神がモーセにどう言われたか、読んだことがないのか。『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあるではないか。12:27 神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。あなたたちは大変な思い違いをしている。」



主イエスは、サドカイ派の人々の「思い違い」は彼らの誤った聖書理解から生じていることを指摘します。主イエスは「モーセの書の『柴』の個所」を引用します。これが当時の聖書引用の仕方なのです〔章は1227年頃から、節は旧約

が1448年頃から、新約は1555年頃からつけられるようになる〕。そこにはこう書かれています。「わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」この言葉だけを用いて主イエスは論証するのは。ここから「神は死んだ者ではなく生きている者の神である」ことが分かるというのです。

「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神であった」のではなく、今も、「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」というのです。「である」という現在形が解釈の鍵です。〔この文章は動詞を使わず、主語と補語を同格に置くことによって作られる同格構文の構造をとっています。〕アブラハムとイサクとヤコブは現在も生きているということになるのです。しかし、聖書が、彼らの死を記録していることを、わたしたちは知っています。彼らは確実に一度死んだのです。だとすれば、今も生きているのなら、復活したということになるのです。

わたしたちは自分や世界の事実について、よく知っていると思っています。しかし自分の実態についても、この世界の实態についても、実は余

り知らないのです。知らない物や事を、謙虚に学びましょう。その時に、それをこの世界の基準や合理だけで理解せずに、神の基準で理解できますように。そしてまたわたしたちに託された神の使者としての働きをまっとうすることができますように。新しい一週間を歩み出したいと思います。祈りましょう。

2019. 2. 10 日本基督教団千歳丘教会礼拝



エルサレム 神殿と境内

12:18 復活はないと言っているサドカイ派の人々が、イエスのところへ来て尋ねた。

12:19 「先生、モーセはわたしたちのために書いています。『ある人の兄が死に、妻を後に残して子がない場合、その弟は兄嫁と結婚して、兄の跡継ぎをもうけねばならない』と。

12:20 ところで、七人の兄弟がいました。長男が妻を迎えましたが、跡継ぎを残さないで死にました。

12:21 次男がその女を妻にしましたが、跡継ぎを残さないで死に、三男も同様でした。

12:22 こうして、七人とも跡継ぎを残しませんでした。最後にその女も死にました。

12:23 復活の時、彼らが復活すると、その女はだれの妻になるのでしょうか。七人ともその女を妻にしたのです。」

12:24 イエスは言われた。「あなたたちは聖書も神の力も知らないから、そんな思い違いをしているのではないか。

12:25 死者の中から復活するときには、めとることも嫁ぐこともなく、天使のようになるのだ。

12:26 死者が復活することについ

ては、モーセの書の『柴』の個所で、神がモーセにどう言われたか、読んだことがないのか。『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあるではないか。

12:27 神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。あなたたちは大変な思い違いをしている。」



12·18 Καὶ ἔρχονται Σαδδουκαῖοι πρὸς αὐτόν, οἵτινες λέγουσιν ἀνάστασιν μὴ εἶ, καὶ ἐπηρώτων αὐτόν λέγοντες, 12·19 Διδάσκαλε, Μωϋσῆς ἔγραψεν ἡμῖν ὅτι ἐάν τις ἀδελφὸς ἀποθάνῃ καὶ καταλίπῃ γυναῖκα καὶ μὴ ἀφῆ τέκνον, ἵνα λάβῃ ὁ ἀδελφὸς αὐτοῦ τὴν γυναῖκα καὶ ἐξαναστήσῃ σπέρμα τῷ ἀδελφῷ αὐτοῦ.

12·20 ἑπτὰ ἀδελφοὶ ἦ· καὶ ὁ πρῶτος ἔλαβεν γυναῖκα καὶ ἀποθνήσκων οὐκ ἀφῆκεν σπέρμα·

12·21 καὶ ὁ δεύτερος ἔλαβεν αὐτήν καὶ ἀπέθανεν μὴ καταλιπὼν σπέρμα· καὶ ὁ τρίτος ὡσαύτως·

12·22 καὶ οἱ ἑπτὰ οὐκ ἀφῆκαν σπέρμα. ἔσχατον πάντων καὶ ἡ γυνὴ ἀπέθανεν.

12·23 ἐν τῇ ἀναστάσει (ὅταν ἀναστῶσιν) τίνος αὐτῶν ἔσται γυνή; οἱ γὰρ ἑπτὰ ἔσχον αὐτήν γυναῖκα.

12·24 ἔφη αὐτοῖς ὁ Ἰησοῦς, Οὐ διὰ τοῦτο πλανᾶσθε μὴ εἰδότες τὰς γραφὰς μηδὲ τὴν δύναμιν τοῦ θεοῦ;

12·25 ὅταν γὰρ ἐκ νεκρῶν ἀναστῶσιν οὔτε γαμοῦσιν οὔτε γαμίζονται, ἀλλ' εἰσὶν ὡς ἄγγελοι ἐν τοῖς οὐρανοῖς.

12·26 περὶ δὲ τῶν νεκρῶν ὅτι ἐγείρονται οὐκ ἀνέγνωτε ἐν τῇ βίβλῳ Μωϋσέως ἐπὶ τοῦ βάρου πῶς εἶπεν

αὐτῷ ὁ θεὸς λέγων, Ἐγὼ ὁ θεὸς Ἀβραὰμ καὶ (ὁ) θεὸς Ἰσαὰκ καὶ (ὁ) θεὸς Ἰακώβ; 12·27 οὐκ ἔστιν θεὸς νεκρῶν ἀλλὰ ζώντων· πολὺ πλανᾶσθε.